

ten count

閉店時刻は過ぎていた。立ち去る最後の客の後ろ姿に「ありがとうございます」と挨拶をした。洗い物の手を止め、厨房から抜け、ホールを横切った。

置き看板のプラグを抜き、暖簾の竿を持ち上げたとき、気配に振り返った。

「看板か？」

トレンチコートの四十がらみの男は、躰つきも貌つきもソリッドだった。

店主は笑顔をつくった。

「どうぞ」

客に続き引き戸を潜った店主は暖簾をホールの片隅に立て掛けると厨房へ戻った。

「かけそばとビール」

「蕎麦は並でいいですか？」

客は頷いた。

ビールとグラスを供してから、冷蔵庫から蕎麦を一玉抜く。煮立った釜へ放り込みさま、器の用意をする。

ものの三分で、蕎麦が客に供された。

虚ろなホールに客が蕎麦を啜る音が響く。

仕事を済ませた店主は、仕掛かりの後片付けを再開した。醤油や塩といった調味料や葱や山葵といった薬味を入れた容器にラップを掛けては冷蔵庫に仕舞ってゆく。

蕎麦を啜る音が途絶え、客は井をあおりはじめていた。

釜が湛えていた湯をシンクに流す。厨房に湯気が立ち込め、シンクが鳴く。

あとは客が用いている食器を洗えばいいだけだ。

「一杯つきあってくれねえか」

店主にとって、稀な要望だった。訝りつつも食指が動いた。

「お言葉に甘えて」

グラスをカウンター越しにグラスを差した。

「マスターは、野球選手だったんだよね？」

「実働は二年足らずですが」

店主は、NPBの選手だったことがある。一年活躍して飛躍が期待された翌シーズンのさなか、故障した。それは癒えずに、戦力外通告を受け、引退した。

「どうして、こんな冴えない商売やってるんだ？」

不躰な問いだったが、不快感を顕わにすることを避けた。

「……野球の次にできることをさがしたときにみつかったのが蕎麦打ちだったってだけです」

暖簾の屋号は、店主が現役時代に所属していたチームの監督が門出を祝ってしたためてくれた。NPBファンのみならず、大半の日本人が貌と名前を識っているであろう人物だ。

客は店主の応えを咀嚼しはじめた。

店主はグラスに口を運んで間を持たせた。

「稼ぎは比べものにならないだろう？　こんな寂れた町に棲んでて狂いそうにならない

か？」

店主は、反駁しようとして、やめた。苦笑で緊張を和らげた。

「別にカネのために野球やってたわけじゃないです。それに、私はスター選手みたいに遊びを覚える暇もなく餓になりましたから」

客の貌に彼の興が認められた。

今度は、店主が訊いた。

「お客さんこそ、どうしたんですか」

実は、店主は客のことを識っていた。面識はないが、客は著名人だった。

すんでのところまで世界に及ばなかったものの、記憶に残るボクサー。引退して数年はタレント活動をしていたものの、いつかマスメディアから姿を消した。

彼のマスメディアへの再登場は彼が逮捕されたというニュースだった。そのつけあわせに彼の近況が報じられた。暴力団とつるんでいて、あるいは杯を交わしているかもしれないという説。

「……リングで死にたかった。引退して、タレントの真似事みたいなこともした。つまらなかった。ヒリヒリしねえんだ。軟弱な連中とスタジオでふざけあってヘラヘラ愛想笑い浮かべてるてめえに厭気がさした。」

現役の頃は、試合が決まったら、それに向けて準備すればよかった。だが、それがなくなっちゃった暮らしは駄目だった。相手ボクサーにのらりくらりと逃げ続けられているみたいだよ」

店主は、即応せずに、間をとった。三冠王に輝いたことのあるベテランの一塁手は、いいタイミングでマウンドにきてくれたものだ。

「確かに、マウンドとこの店は比べものになりません。餓になってから二・三年は何をやっても長続きしませんでした。半ば自棄になっていました。夜遊びしているうちに、本職になった同級生に誘われたこともありま

す。でも、裏切れなかったんです」
元ボクサーは、釣り込まれた。

「ずっとじぶんを応援してくれたひとたちを」

意表を衝かれたらしい表情が元ボクサーの貌を覆った。

次いで、笑み。

自嘲の笑みらしかった。

「幾らだ？」

「一〇〇〇円になります」

元ボクサーは一万円札をくれた。

「釣りはいい」

辞退しようとしたが、「いいから」と押しきられた。

元ボクサーが戸の前に到る。

「俺もあんたみたいに考えられてたらな」

元ボクサーが戸を潜った。

「間に合いますよ」

戸が閉まる際、元ボクサーが背を向たまま手を挙げて応えたのが覗いた。

店主は降板してベンチに戻ったときのように放心しようとした。

この界隈に暴力団関係者の親類が棲んでいと聞いたことがある。

店主は、弾かれたように、元ボクサーが潜った戸を見遣った。

途次、コートの懐でタバコに火を点けた。

気配に反応しようとしたとき、フラッシュが閃き、破裂音がした。足払いをされたようにように転倒する。

久々の、ダウン。

レフェリーの靴音が迫ってくるのをやめるが早いかカウントを始める。衝き刺すような照明と背中マットの感触。

あのとときと違って、靴音は足早に遠ざかっていったし、アスファルトは冷たかった。